

呈する（ヤマトは完全に黒色）ことで容易に識別できる。ヤマトはクロコメツキ *Ampedus (Ampedus) ivanovi* (Jakobson, 1913) にも似るが、クロコメツキの毛は一樣に褐色で、前胸背板にはオパール色の光彩を欠く（ヤマトの背面の毛は黒色で、前胸背板にはオパール色の光彩を有す）ことによって容易に識別できる。また、上記3種は雄挿入器の形状が明確に異なる。

ヤマトの顕著な特徴として「前胸背板表面のオパール色光彩」があげられるが、原記載 (Kishii, 1988) ではこの特徴が記述されておらず、長らく記載者以外には本種を認識できない原因になっていたと思われる。本報告により、本種は日本産最大の属であるコメツキムシ属 *Ampedus* の中でも比較的容易に同定が可能な種であることが判明した。

分布

本州（和歌山県；奈良県；兵庫県；京都府；長野県；山梨県；宮城県）、九州（大分県）。兵庫県、長野県、九州からは初めて記録される。

本種のこれまでの分布記録は少ないが、本州、四国、九州に広く分布していると予想される。また、アカハラクロコメツキの分布記録の中には、腹板

の色彩変異個体として誤同定されたものがある可能性も有るので、本種の正確な分布を理解するためにも、同好諸氏には再確認をお願いしたい。

謝辞

本文を草するに当たり、タイプ標本の借用をはじめ種々お世話頂いた大阪市立自然史博物館の初宿成彦氏に厚くお礼申し上げる。また、貴重な標本の支援を頂いた豊橋市自然史博物館の長谷川道明氏、西宮市の森正人氏、宝塚市の小田中健氏に心からお礼申し上げます。

引用文献

- Kishii, T., 1988. A study of *Ampedus (Ampedus) ivanovi* (Jakobson, 1913) and its allied species from Japan, with descriptions of some new taxa (Some new forms of Elateridae in Japan, XXI). Bulletin of the Heian High School, Kyoto, Japan, (32): 11–22, pls. I–IV.
- Kishii, T., 1999. A check list of the family Elateridae from Japan (Coleoptera). Bulletin of the Heian High School, Kyoto, Japan, (24): 1–144.
- 水野弘造・岸井 尚, 2014. 初宿成彦編, 大阪市立自然史博物館所蔵甲虫類目録(3) コメツキムシ科(1). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録, 46: 113–198.

(2017年7月6日受領, 2017年8月22日受理)

【短報】石垣島中央部森林地帯で2月下旬に採集されたイリオモテボタル

イリオモテボタル *Rhagophthalmus ohbai* Wittmer, 1994 (Wittmer & Ohba, 1994) は、石垣島、西表島および小浜島から知られている。12月中旬から1月中旬に出現し、その生息環境は人家の石垣や草地で、幼虫はヤスデを捕食しているという (大場, 1996)。

筆者らは、2007年2月19日夜8時に石垣島中央部のオモト岳の麓、嵩田林道の最高点 (約150m) の林道脇にマレーズトラップを設置した。設置場所は片側が森林、反対側が少し伐採され、ひこばえの多い斜面となっており、この斜面側である。設置時は雨が強く降っており、3日後の2月22日午前中に



図1. イリオモテボタル♂, 体長9.5mm (左: 背面, 右: 側面)

このトラップを回収したところ、イリオモテボタル1頭 (雄) が捕獲されていた。

♂, 沖縄県石垣市嵩田林道, 22. II. 2007, 筆者ら採集。

今回得られた場所は石垣島中央部の森林地帯であり、生息環境は、これまで言われてきた人家の石垣や草地だけでなく、実際はもっと広く生息しており、今回は2月下旬に採集されたことから、出現時期も場所によっては幅があるものと思われる。

なお、調査にあたり、マレーズトラップ設置許可をいただいた、当時の沖縄県林業試験場の具志堅允一場長に謝意を表す。また、イリオモテボタルの同定にあたり、確認の労をとっていただいた愛媛大学の吉富博之博士に、厚くお礼を申し上げます。

引用文献

- 大場信義, 1996. ヤスデを捕食するイリオモテボタルの幼虫. 全国ホタル研究会誌, 29: 21–22.
- Wittmer, W. & N. Ohba, 1994. Neue Rhagophthalmidae (Coleoptera) aus China und benachbarten Landern. Japanese Journal of Entomology, 62(2): 341–355.

(横原 寛 いすみ市日在 2033-5)

(加賀谷悦子 森林総合研究所森林生物部
昆虫生態研究室)